

PHOTO 重田琢也

生研 ニュース

IIS NEWS
No.143
2013.8



矢吹町
大正ロマンの館

IIS
TODAY

今回の主役は建物です。表紙を飾ったのは福島県矢吹町にある「大正ロマンの館」と呼ばれる大正9年に建てられた洋館。東日本大震災で壁の崩落、土台のずれなどの大きな被害が出ましたが、地域の皆さん、建築家のグループが保存運動を開始し、現在、修復が少しずつ進んでいます。

生産技術研究所では、2012年7月に矢吹町と「震災復旧及び復興に向けた連携・協力に関する覚書」を締結。腰原幹雄研究室、村松伸研究室、太田浩史研究室、目黒公郎・大原美保研究室などを中心に、復興まちづくりへの総合的サポートを続けています。大正ロマンの館のがれき撤去から始まった活動は、その修復・利活用計画、

まちづくりワークショップの開催、総合的防災計画の提案、そして町の未来を決める都市マスタープラン作成にまで広がっています。今日の記念撮影は、6月に行われた勉強会の一コマ。生研メンバーとともに、町の皆さん、役場の皆さん、地域で活動続ける建築家の皆さんに登場して頂きました。

蝶ネクタイのように見えるのは、実はブルーシートです。雨が入らないようにするための応急処置なのですが、腰原教授の粋な提案で、ユーモアたっぷりの表情となりました。生研ならではの現場主義で、今後も矢吹のまちの復興のお役に立ちたいと考えています。

(太田 浩史)

AGH 工科大学との交流協定調印式

去る5月8日、本所とポーランド AGH 工科大学 (AGH University of Science & Technology) との交流協定調印式が行われました。駐日ポーランド国大使館コザチェフスキ大使ご出席のもと、中埜本所所長と AGH 工科大学副学長シュムス氏により協定

書に署名が行われました。

AGH 工科大学はポーランド国クラコフ市にあるポーランド有数の工科大学で、エネルギー、資源開発、金属、冶金に輝かしい伝統があり、近年ではコンピュータ・サイエンスにも力を入れています。交流に係る本所の

の技術窓口は附属エネルギー工学連携研究センターと附属サステイナブル材料国際研究センターが担うこととなり、交流の具体的検討が進められています。

(エネルギー工学連携研究センター
特任教授 金子 祥三)



協定書を交わす中埜所長と AGH 工科大学シュムス副学長

南アフリカ共和国 鉱物資源大臣一行の本所見学会開催

5月15日（水）午前、南アフリカ共和国から鉱物資源大臣の Susan Shabangu 女史をはじめ、在日南アフリカ共和国大使館全権特命大使の Mohau N. Pheko 女史、MINTEK 理事長兼 CEO の Abiel Mngomezulu 氏ら、南アフリカ共和国関係者一行 12 名が本所を訪問されました。

岡部徹教授（サステイナブル材料国際研究センター、センター長）と吉江尚子教授（同、副センター長）から本所の概要説明を受け、その後、岡部徹教授と森田一樹教授（同、前センター長）の両研究室を視察されました。南アフリカ共和国では白金

族金属をはじめとする豊富な鉱物資源の産業利用をより一層推進していく国家戦略プログラムが始動しています。大臣ら一行は、本所におけるレアメタル資源の利用に関わる最先端の科学技術の研究現場の視察と人的交流を目的として訪問されました。

岡部研究室では岡部教授より白金族金属のリサイクル技術やチタンなどのレアメタルの製錬技術についての説明がされました。その後、森田研究室では森田教授より白金族金属およびシリコンの製錬技術に関する研究内容の説明がなされました。一行は本所の金属生産分野における活

発な活動に深く関心を示すとともに、熱心に説明に耳を傾けていました。地階の分析装置等の視察には、中堅本所所長も加わり、大臣とご挨拶、ご歓談されました。

見学会後のランチ交流会では本所若手教員らとの懇談もありました。短い訪問時間ではありましたが、今回の南アフリカ共和国からの来訪は両者にとって非常に有意義なものでした。

（サステイナブル材料国際研究センター 岡部（徹）研究室 特任助教 野瀬 勝弘）



第9回技術フォーラム 日本のエネルギーの50年と今後

2011.3.11の東日本大震災以降、日本のエネルギー情勢は大きく変化し、激動の時代を迎えている。原子力発電所の停止とそれに伴う火力発電所の大幅な発電量増加は、燃料費の急増や貿易収支の悪化など経済面でも大きな影響を与えている。このような中で日本のエネルギー政策は白紙に戻され検討されることになっている。今ほど過去の経験に学び、確かな未来を構築することが求められている時はない。そこで、5月17日にエネルギー全般、石油、天然ガス、石炭について日本を代表する講師にご講演いただいた。

まず基調講演として（一財）国際経済交流財団会長である日下一正様に「日本のエネルギー政策の50年」と題してご自身の経験を踏まえ50年

間を振り返り、また今後のエネルギー政策についてご講演いただいた。石油資源については、東京大学名誉教授である藤田和男様に「日本の石油エネルギー資源の50年」と題して、石油資源のこれまでの歴史やベストミックスのあり方についてご講演いただいた。天然ガスに関しては、東京ガス(株)常務執行役員・エネルギー生産本部長である救仁郷豊様に「日本の天然ガス資源：LNGの50年」と題して世界の天然ガス市場における日本のこれまでの経験と今後についてご講演いただいた。特に、シェールガスについては、最新の貯留層工学の立場からその可能性と将来性についてFR CER（本学エネルギー・資源フロンティアセンター）センター長でもある佐藤光三教授に「貯留層

工学からみたシェールガス革命」と題してご講演いただいた。最後に金子（特任教授）より「石炭と日本の将来」と題して石炭資源と日本の今後の進むべき方向性について講演した。

当日は、本所 An 棟コンベンションホールおよびホワイエでのモニタ聴講を含め約300名の方に御参加いただいた。資源のほとんどを海外に依存する日本において今後、国際社会とどのように向き合っていくのか考える良い機会となり大変有意義なフォーラムであったとの声が寄せられている。

（エネルギー工学連携研究センター
特任教授 金子 祥三）



日下様



藤田様



救仁郷様



佐藤教授



金子特任教授

ITS セミナー in 岩手

本所先進モビリティ研究センター (ITS センター) と各地の大学や行政が共同で開催する「東京大学 ITS セミナーシリーズ」が、2013年5月29日、岩手県立大学 (岩手県滝沢村) で開催され、通算して20回目を数えました。

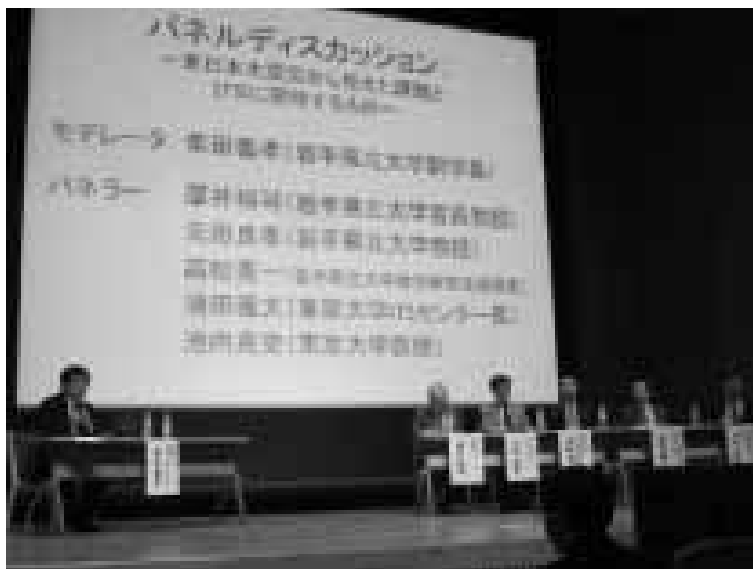
「防災とITS」をテーマとした今回は、当センターの須田教授、池内教授、大口教授より、文部科学省・経済産業省等から支援を受けた震災復興プロジェクト、被災状

況や震災遺構のデジタル保存、震災後の大型車交通流などに関する研究が紹介されました。続いて、岩手県立大学の柴田副学長、元田教授、厚井客員教授より災害時の通信システム、給油・交通行動の分析、行政の情報共有システムなどについて、大震災の現場における経験に基づいて紹介されました。後半では、岩手県の前防災危機管理担当課長の高松氏を交えたパネルディスカッションが開かれ、大震災から見えた課題と

ICT (Information and Communication Technology) ・ITS への期待について討論が行われました。会場の参加者は過去最大級の約180名を数え、盛況となりました。

今回のITSセミナーは、本年10月に東京を主会場として開催されるITS世界会議に合わせ、路面電車と自動車のまち・広島で開催される予定です。

(先進モビリティ研究センター
特任准教授 小野 晋太郎)



「駒場リサーチキャンパス公開 2013」開催される

5月31日（金）と6月1日（土）の両日、駒場リサーチキャンパス公開が行われました。昨年とほぼ同じ5,000人を超える来訪者をお迎えしました。

今年は「エネルギーのみらい」をキャンパス公開の全体テーマとして掲げました。我々の社会活動には「エネルギー」が不可欠ですが、東

日本大震災以降日本のエネルギー開発の方向性は大きく変わりつつあります。有限な化石燃料をより効率的に使いつつ、再生可能かつクリーンなエネルギーに転換していく必要があります。そのようなエネルギーの未来を明るくするために本所が取り組んでいる研究を紹介し、今後進むべき道について共に考える目的で、

金子祥三特任教授による「日本のエネルギーの動向と産業復興」の講演が行われました。

生研ホームページ (<http://www.iis.u-tokyo.ac.jp>) には、ポスターギャラリー 2013 がございます、ぜひご覧ください。

(総務・広報チーム (広報担当))



未来の科学者のための駒場リサーチキャンパス公開 2013

2013年5月31日(金)、6月1日(土)に、次世代育成オフィス(ONG)では、所内ボランティアグループであるSNG(Scientists for the Next Generation!)と協力し、「未来の科学者のための駒場リサーチキャンパス公開」を、駒場リサーチキャンパス公開に合わせて開催しました。2日間で中学・高校19校と個人の参加を併せて978名の参加がありました。

例年通り、中学・高校生を対象とした「団体見学」「個人見学」「自由見学」の3つの見学コースを設置しましたが、金曜日は企業関係者等が多く訪れることから、混雑を避けるため自由見学をなくしました。また、昨年・一昨年の団体見学では、引率員なしで参加者自らチケットに印刷された研究室を目指し見学するとい

う方式をとっていましたが、今年は団体見学にも引率をつけ、見学してもらいました。

また、昨年初めて開催した地下アトリウムでの中学・高校生向けイベントを今年も開催しました。東京地下鉄株式会社(東京メトロ)と日本精工株式会社(NSK)の協力を得て、両日とも展示ブースを設け、社員の方に直接解説していただきました。また、1日(土)は、大学院生が中心となって開催したサイエンスカフェに中学・高校生が途切れることなく参加していました。地下アトリウムには多くの生徒が集まり、大盛況に終わりました。

見学後のアンケートでは、参加生徒の多くが科学技術への関心が高まったと回答しており、「どれもこ

れも最先端の技術で、これらがこれからの世の中に流れて、役に立っていくのだなあと思うと感慨深いものがあった。」「とても分かりやすい説明のために図や映像を準備してくださったのが良かったです。」「将来絶対、研究者になりたいと思った。」といった感想が寄せられました。多くの研究室にご協力いただき、普段見ることができない実験装置の見学や体験などを通して、科学技術の魅力を伝えることができたのではないかと思います。

最後になりましたが、ご協力頂いた各研究室の皆様にご挨拶申し上げます。

(次世代育成オフィス
特任助教 川越 至桜)



「生産技術研究所創立 60 周年記念事業 感謝の集い」開催

6月1日（土）、本所創立60周年記念事業「感謝の集い」が、本所S棟（「60周年記念館」）にて開催された。

この集いは、本所創立60周年記念事業にご寄附を賜り、あるいは記念事業の一環であるアーカイブ事業に貴重な歴史資料をご提供いただいた所内外の方々をお招きし、ご厚志に対し感謝の意を表するとともに、本事業の柱である本所S棟のお披露目も兼ねて開催されたものである。

開会に先立ち、アーカイブ事業に資料をご提供いただいた8名の方々の中埜所長より感謝状が贈呈された。

集いには、感謝状を贈呈された方々を含め、主賓として31名が出席され、本所からは、中埜所長、野城前所長、加藤（信）副所長、光田副所長、藤井副所長をはじめ記念事業の関係教職員が出席した。

光田副所長の進行により、中埜所長の挨拶のあと、今井准教授から本

所S棟の工事概要についてパワーポイントにより説明が行われ、その後、今井准教授の案内により本所S棟内の見学会が行われた。見学会では、新装となった建物に熱心に質問される方が多く、盛会であった。

見学および記念撮影の後、同窓会総会の懇談会に合流し、なごやかに懇談が行われ閉会となった。

（千葉実験所整備準備室
依田 晴樹）



平成 25 年度生研同窓会総会およびパーティが開催される

駒場リサーチキャンパス公開の2日目にあたる6月1日（土）16時から、本所総合研究実験棟（An棟）大会議室において、平成25年度生研同窓会総会が開催され、現役も含めて31名が参加した。会長の岡田恒男氏による開会の辞で始まり、吉川暢宏幹事長（基礎系部門・教授）と鈴木敏人幹事（事務部長）

による平成24年度と平成25年度の事業と予算に関する報告と計画紹介があった。また、役員交代が諮られ、新会長に原島文雄氏、副会長に鈴木基之氏が選出された。その後、吉川幹事長と目黒公郎幹事（都市基盤安全工学国際研究センター・教授）による海外支部報告と、滞りなく議事が進行された。

その後、同じ建物1階のレストランへと場所を移し、生研同窓会パーティが開催された。

こちらでは、中埜本所所長による開会挨拶に引き続き、参加者全員での記念撮影を行い、和やかな雰囲気の中、閉会した。

（総務・広報チーム（広報担当））



「イノベーション基盤シミュレーションソフトウェアの研究開発」 最終成果報告会開催

平成20年度にスタートした「イノベーション基盤シミュレーションソフトウェアの研究開発」プロジェクトは平成25年3月に終了しました。このプロジェクトにおける5年間にわたる研究開発成果の報告と今後の新しい展開の紹介を目的に6月6日(木)、7日(金)の両日、本所An棟コンベンションホールにて「最終成果報告会」を開催し、延499名の方々にご参加いただきました。

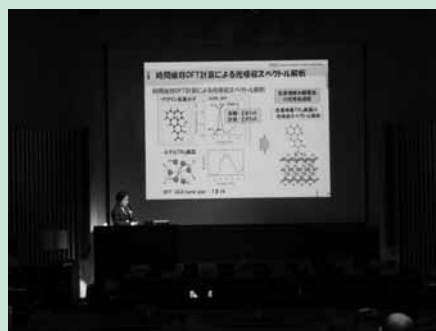
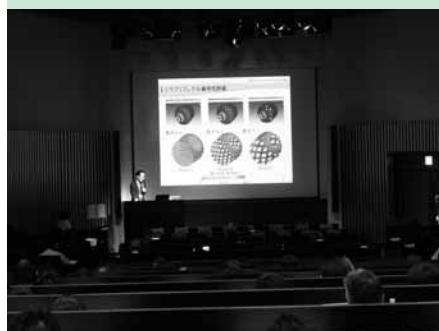
このプロジェクトでは、熱流体・構造解析系ソフトウェアを4本(FrontFlow/blue、FrontISTR、FrontCOMP、REVOCAP)、分子・原子系解析ソフトウェアを

3本(ProteinDF、ABINIT-MP/Biostation、PHASE-SYSTEM)研究開発してきました。初日には各ソフトウェアのテーマリーダーからそれぞれの機能と今後の普及の方法・体制についてご講演いただきました。2日目には、産業界の各ソフトウェアユーザーの方々から代表的な事例のご紹介を行っていただきました。

広い意味でのものづくりの革新に貢献できる基盤的ソフトウェアを研究開発する一連のプロジェクトは、「戦略的基盤ソフトウェアの開発」(平成14年度～平成17年度)に始まり「革新的シミュレーションソフトウェアの研究開発」(平成17年度～平成

20年度)、「イノベーション基盤シミュレーションソフトウェアの研究開発」へとソフトウェアの機能を強化してきましたが、今回で一区切りつけることとなります。しかし、プロジェクト終了後も新しい機能の増強・普及活動を継続して欲しいとの希望が多くの方々から寄せられました。今後も当センターが受け皿となって社会からの期待に沿えるよう一層の努力を行うことを表明して報告会を終了いたしました。

(革新的シミュレーション研究センター
センター長 加藤 千幸)



第6回駒場オープンテニス大会を終えて

今年で6回目となる弥生会主催駒場オープンテニス大会が、6月10(月)から14日(金)の5日間にわたって駒場リサーチキャンパステニスコートにて行われました。

今年は昨年よりさらに参加者がふえ、生研・先端研あわせて70人(そのうち留学生は5人)が8チームに

わかれて団体戦のトーナメントを行いました。

テニス大会期間中の一週間はあいにくの梅雨空でしたが、連日多くの方が試合を応援にきてくださいました。

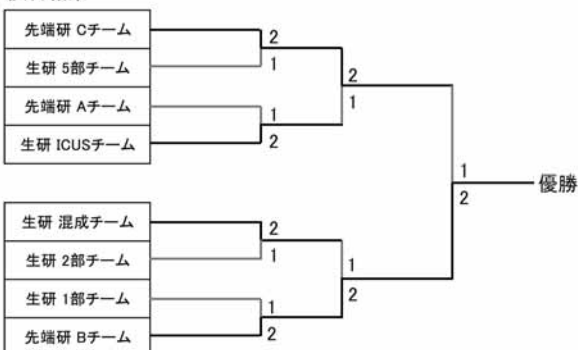
今年は生研チームの力が及ばず、決勝戦は先端研チーム同士の対戦と

なりました。

生研の皆様、今年1年しっかりと練習してぜひとも来年は優勝を目指してください。

(基礎系部門 町田研 助教 守谷 頼)

試合結果



決勝戦の先端研 C チームおよび先端研 B チームの写真



3位の生研 ICUS チーム



生研サロン開催される

6月21日（金）夕刻に2013年度第1回目の生研サロンが開催されました。今回は先進モビリティ研究センター／情報・エレクトロニクス系部門から大石岳史先生と、基礎系部門から田中肇先生に話題提供していただきました。大石先生には「広域空間における複合現実感」と題して、アンコールワットや飛鳥京といった歴史的建造物等を三次元でデジタル化するというご研究を紹介していただきました。復元された三次元像の見目の美しさもさることながら、広域な空間を2cmの空間分解能で忠

実に三次元化するためのサイエンスに出席者の興味は尽きませんでした。また、田中先生には「ソフトマターから液体まで—基礎研究のすすめ—」と題して、ソフトマターや液体で観測される不思議な現象と、その現象の起源を深く掘り下げたご研究を紹介していただきました。液体やソフトマターは我々の身近な物質であり、出席者からは各分野の視点からたくさん質問が出て議論が盛り上がりました。また、わずか3か月の海外滞在期間中に8報もの学術論文を出された田中先生のアクティビティの

高さに会場からも驚きの声が上がっておりました。私もぜひ見習いたいと思います。次回の生研サロンは古関潤一先生と鈴木高宏先生に話題提供をお願いしており、9月19日に開催予定です。生研サロンは本所メンバーの研究内容や、これまで研究者として歩んできた歴史、今後の夢などを聞くことのできる大変貴重な場です。ぜひ多くの皆様にご出席いただければと思います。

（企画運営室 物質・環境系部門
准教授 溝口 照康）



本学プレジデント・カウンスル会議および 総長らの生研バンコクオフィスの訪問

5月30日、タイ王国バンコク市において第10回プレジデント・カウンスル会議が開催された。本会議は、各分野で世界的に著名な業績を有する方々と総長をメンバーとする会議で、本学のとるべき方向に対するガイダンスと支援を得るために、毎年世界各地で開催されている。今回のバンコク市での開催は、会議のメンバーであるタイ王室のチュラポーン王女殿下のお招きによるものである。会議に先立って、タイの本学卒業生

や現地の日本企業や国際機関などのVIPを招待したレセプションが開催され、約150名が参加した。併せて、生研同窓会タイ支部を含む在タイの3つの同窓会の代表と、濱田総長や江川卒業生室長（理事）、羽田国際本部長（副学長）との会合も開催され、本学の海外同窓会活動に関する意見交換が行われた。カウンスル会議の前日には、濱田総長らがバンコク市の中心部にあるチュラロンコン大学内の生研バンコクオフィスを訪問さ

れ、施設の見学と意見交換を行った。この中で、目黒本所教授が生研オフィスとアジア地域での研究・教育活動を紹介するとともに、これからの本学や本所の国際戦略とアジア展開について、濱田総長らと活発な議論をさせていただいた。

（人間・社会系部門 特任准教授

川崎 昭如、

都市基盤安全工学国際研究センター

教授 目黒 公郎）



各同窓会代表と濱田総長や江川卒業生室長との意見交換会



タイ生研同窓会代表 Suvit 博士



濱田総長らの生研バンコクオフィスの訪問



東大の国際戦略とアジア展開について議論

外国人研究者講演会

<p>5月20日(月) 司会：教授 井上 博之</p> <p>Associate Prof. Jincheng Du Department of Materials Science and Engineering, University of North Texas, USA RARE EARTH ION ENVIRONMENT AND CLUSTERING IN SILICATE, ALUMINATE, AND PHOSPHATE GLASSES</p> <p>-シリケートガラス、アルミネートガラス、フォスフェートガラス中の希土類イオンの環境とクラスタリング- 希土類を含有するガラスは光学材料や磁性材料として、さらに光通信の分野において、用いられている。 本講演では、希土類イオンを含有するシリケートやアルミネートやリン酸塩ガラスの最近の我々の古典分子動力学法を用いたシミュレーションを概説し、その局所構造や偏析について議論する。</p>	<p>6月26日(水) 司会：准教授 竹内 昌治</p> <p>Prof. Carsten Werner Head, Institute of Biofunctional Polymer Materials, Leibniz Institute of Polymer Research Dresden, Max Bergmann Center of Biomaterials Dresden, Germany GLYCOSAMINOGLYCAN-BASED CELL-INSTRUCTIVE POLYMER MATRICES</p> <p>細胞外マトリックスを模倣したヘパリン付加型ポリエチレングリコールゲルを設計・合成し、培養細胞の足場としたところ、血管内非細胞の血管新生促進やヒト間葉幹細胞の分化を確認できた。このように細胞培養時の足場となる機能性高分子材料のチューニングにより、細胞の分化などを制御する研究について講演を行う。</p>
--	--

外国人客員研究員

氏名	国籍・所属	研究期間	受入研究室
HSIEH Hung-Ren (謝 宏仁)	台湾	2013. 8. 1 ~ 2014. 3.31	人間・社会系部門 野城研究室

外国人協力研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
JING Chaojun (景 朝俊)	中華人民共和国	2013. 9. 1 ~ 2014. 8.31	物質・環境系部門 石井研究室
KAINLAURI Markku Samuli	フィンランド共和国	2013. 9. 1 ~ 2014. 3.14	機械・生体系部門 川勝研究室

準博士研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
鳥取 聡一郎	日本	2013. 6. 1 ~ 2013. 6.30	機械・生体系部門 竹内研究室

東京大学特別研究員

氏名	国籍	研究期間	受入研究室
GOYAL Manish Kumar	インド	2013. 9. 1 ~ 2015. 8.31	人間・社会系部門 沖研究室
INGEBRIGTSEN, Trond Sylvan	デンマーク	2013. 9. 1 ~ 2015. 8.31	基礎系部門 田中研究室
KALASHNIKOVA, Aleksandra Mikhailovna	ロシア	2013. 9. 9 ~ 2013.12. 8	基礎系部門 志村研究室
MULYANA, Yanyan	オーストラリア	2013. 8. 1 ~ 2015. 7.31	物質・環境系部門 石井研究室

PERSONNEL

■人事異動

生産技術研究所 教員等

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 5. 1	小倉 正平	配置換	助教 基礎系部門	技術専門職員 基礎系部門

(特任教員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 6. 30	中野美由紀	任期満了	特任准教授	特任准教授
25. 7. 1	横川 晴美	任命	特任教授 (特定短時間)	特任研究員 (特定短時間)
25. 7. 1	堤 敦司	採用	特任教授	教授 エネルギー工学連携研究センター エネルギープロセス分野
25. 7. 1	丸山 康樹	採用	特任教授	客員教員 エネルギー工学連携センター
25. 7. 1	中野美由紀	採用	特任准教授	特任准教授

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 4. 16	馬渡 正道	採用	特任研究員	主幹研究員 アンカーリサーチ株式会社
25. 5. 16	柳島 大輝	採用	特任研究員	Postdoctoral Research Assistant Department of Chemistry, University of Cambridge
25. 5. 16	永田 隆一	採用	特任研究員	主任研究員 オホーツク・ガリンコタワー株式会社
25. 5. 16	村上 曜	採用	特任研究員	プロジェクト研究員 (独) 宇宙航空研究開発機構
25. 5. 16	SUWAL LAXMI PRASAD	採用	特任研究員	—
25. 6. 1	SONI DARMAWAN	採用	特任研究員	講師 バンドン工科大学リモートセンシングセンター
25. 6. 16	生島 弘彬	採用	特任研究員	ポストドクトラルフェロー テキサス州テキサス大学 サウスウエスタンメディカルセンター
25. 6. 16	光安 皓	任命	特任研究員	技術職 (正規職員) パシフィックコンサルタンツ株式会社 マネジメント事業本部 交通政策部 交通戦略室
25. 7. 1	BACCOUCHE Alexandre	採用	特任研究員	—
25. 7. 1	鳥取聡一郎	採用	特任研究員	准博士研究員
25. 7. 1	佐藤 元彦	採用	特任研究員	博士研究員
25. 7. 1	神藤 恵史	採用	特任研究員	企画調査員 (契約) (独) 国際協力機構

(学術支援専門職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 6. 1	峰岸 直美	採用	学術支援専門職員	学術支援専門職員 (特定短時間勤務有期雇用教職員)
25. 6. 1	清水 恵美	採用	学術支援専門職員	学術支援職員

(学術支援職員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 5. 31	北川 理恵	任期満了	—	学術支援職員

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 5. 31	清水 恵美	辞職	学術支援専門職員	学術支援職員
25. 6. 30	高田 真美	任期満了	学術支援専門職員 (特定短時間)	学術支援職員

生産技術研究所 技術系

(所内異動)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 5. 1	小倉 正平	配置換	助教 基礎系部門	技術専門職員 基礎系部門

(休職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 4. 7	飯塚 哲彦	休職更新	技術専門職員 情報・エレクトロニクス系部門	—

生産技術研究所 事務系

(休職)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 5. 1	川崎 伸一	休職更新	係長 経理課連携研究支援室 執行チーム	—
25. 7. 1	田所 正裕	休職更新	一般職員 総務課総務・広報チーム	—

(臨時的採用)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 6. 1	武藤 恒子	臨時的採用	一般職員 総務課人事・厚生チーム	—

(学内異動 (出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 7. 1	水谷 彰	配置換	係長 人事部人事企画課 (関東甲信越地区国立大学法人等職員採用試験事務室)	総務課係長 (総務・広報チーム)
25. 7. 1	井上 麻子	配置換	係長 教育・学生支援部奨学厚生課厚生チーム	千葉実験所事務室係長

(学内異動 (入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 7. 1	安部 秀明	配置換	経理課係長 (連携研究支援室企画チーム)	係長 総合企画部法務課企画調査チーム
25. 7. 1	寺岡 依里	配置換	総務課一般職員 (総務・広報チーム)	一般職員 総合企画部総務課総務チーム

(学外異動 (出))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 7. 1	山田 哲史	在籍出向	係長 大学入試センター総務企画部総務課研究支援係	経理課係長 (連携研究支援室企画チーム)
25. 7. 1	千葉 大輔	在籍出向	主査 (係長級) 宇宙航空研究開発機構契約部相模原契約課	経理課主任 (連携研究支援室執行チーム)
25. 7. 1	長田 朱美	在籍出向	一般職員 日本学術振興会国際事業部国際企画課海外センター係	経理課一般職員 (連携研究支援室企画チーム)

(学外異動 (入))

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 7. 1	南 雅浩	復帰	経理課係長 (連携研究支援室執行チーム)	主査 (係長級) 宇宙航空研究開発機構契約部筑波契約第2課

PERSONNEL / AWARDS

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 7. 1	畠山 良一	復 帰	千葉実験所事務室係長	係長 大学入試センター総務 企画部総務課研究支援 係
25. 7. 1	山口 達也	復 帰	経理課主任 (連携研究 支援室企画チーム)	一般職員 日本学術振興会研究事 業部研究事業課企画係 主任

地球観測データ統合連携研究機構 教員等

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 4.16	SHRESTHA MAHESWOR	採 用	特任研究員	水力技師 ネパールエネルギー省 電力開発局
25. 4.30	森 正人	辞 職	特任研究員 大気海洋研究所	特任研究員
25. 6. 1	会田健太郎	採 用	特任研究員	特任研究員 工学系研究科

ナノ量子情報エレクトロニクス研究機構 教員等

(特任研究員)

発令年月日	氏名	異動内容	新職名・所属	旧職名・所属
25. 4.30	大島 利雄	任期満了	研究員 株式会社富士通研究所	特任研究員
25. 5. 1	鈴木 誠	任 命	特任研究員	商品開発担当部長 (株) QD レーザ 事業開発部
25. 5. 1	近藤 勇人	任 命	特任研究員	デザイン・エンジニア (株) QD レーザ デバイス事業部
25. 5. 1	田中 伸	任 命	特任研究員	デザイン・エンジニア (株) QD レーザ デバイス事業部
25. 5. 1	前多 泰成	任 命	特任研究員	デザイン・エンジニア (株) QD レーザ デバイス事業部

配置換



●経理課係長
(連携研究支援室企
画チーム)
安部 秀明



●総務課一般職員
(総務・広報チーム)
寺岡 依里



●経理課主任
(連携研究支援室企
画チーム)
山口 達也



●経理課係長
(連携研究支援室執
行チーム)
南 雅浩



●千葉実験所事務室係長
畠山 良一



●総務課一般職員
(総務課人事・厚生
チーム)
武藤 恒子

復 帰

採 用

受賞 教員

所属・研究室	職・氏名	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
情報・エレクトロニクス系部門	教授 合原 一幸	2013年度 計測自動制御学会 制御部門大会賞 計測自動制御学会	クラスタ化に基づく positive ネットワークの H2- 状態集約化と化学マスター方程式の低次元化への応用	2013. 3. 7
機械・生体系部門	教授 川勝 英樹	Outstanding Poster Award Materials Research Society, USA	Multimodal Dynamic Mode Liquid Atomic Force Microscopy	2013. 4. 3
基礎系部門	准教授 清田 隆	平成 25 年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞 文部科学省	地盤の液化化特性に及ぼす年代効果の影響と大変形挙動の研究	2013. 4.16
情報・エレクトロニクス系部門	教授 藤田 博之	日本機械学会賞 (論文) 日本機械学会	ナノスケールプローブ先端の電気的コンタクト特性	2013. 4.19
人間・社会系部門 今井研究室	助教 本間健太郎	日本都市計画学会 論文奨励賞 日本都市計画学会	目的地選択モデルの開発とそれに基づく地の利・購買地分布・最適施設配置の解明	2013. 5.24
機械・生体系部門 横井研究室	助教 金藤 芳典 教授 横井 秀俊	第 23 回 (平成 24 年度) プラスチック成形加工学会論文賞 プラスチック成形加工学会	型内ランナー切替装置による段差部流動樹脂挙動の可視化解析	2013. 5.24
人間・社会系部門	教授 加藤 信介 助教 樋山 恭助	日本風工学会 出版賞 日本風工学会	Ventilating Cities	2013. 5.29
物質・環境系部門	教授 岡部 徹	第 12 回グリーン・サステイナブルケミストリー賞 環境大臣賞 新化学技術推進協会	レアアースのグリーン・リサイクル技術の開発	2013. 6. 6
基礎系部門	准教授 清田 隆 名誉教授 小長井 一男	平成 24 年度地盤工学会論文賞 地盤工学会	Breacing failure of a huge landslide dam formed by the 2005 kashmir earthquake	2013. 6.13
機械・生体系部門	准教授 竹内 昌治	OUTSTANDING ORAL PRESENTATION AWARD NOMINATION Transducers2013	SYNTHETIC NANOCAGE FOREMED BY RHODIUM-ORGANIC CUBOCTAHEDRA: FOR SINGLE MOLECULE DETECTION IN LIPID BILAYER	2013. 6.20

学生 受賞

所属・研究室	学年・名前	受賞名・機関	受賞項目	受賞日
情報・エレクトロニクス系部門 高宮研究室	博士課程 1 年 井口 俊太	Best Paper Award IEEE	Zero Phase Difference Capacitance Control for Magnetically Resonant Wireless Power Transmission	2013. 5.16
人間・社会系部門 竹内(渉)研究室	博士課程 2 年 朴 慧美	ISRS2013 Student Award International Symposium on Remote Sensing 2013	Quantifying CO ₂ budget from tropical peatlands in Indonesia by using remote sensing bio-geophysical modeling	2013. 5.17
機械・生体系部門 竹内(昌)研究室	博士課程 3 年 手島 哲彦	化学とマイクロナノシステム学会 第 27 回研究会 優秀ポスター賞 化学とマイクロナノシステム学会	多角度共焦点観察のための磁場による単一接着細胞ハンドリング技術の構築	2013. 5.24

AWARDS

受賞のことば

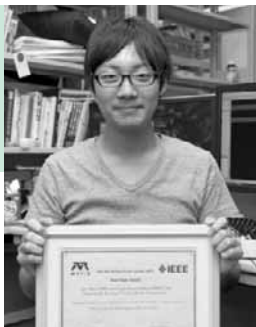
情報・エレクトロニクス系部門
高宮研究室
博士課程1年

井口 俊太

Best Paper Award

IEEE

Zero Phase Difference Capacitance
Control for Magnetically Resonant
Wireless Power Transmission



このたび、このような賞をいただき、大変光栄に思っております。携帯電話などの電子機器向けの無線給電技術に関する研究を行なっています。中～遠距離での無線給電に適した磁界共鳴方式向けに、キャパシタコントローラを開発したことで近～遠距離で常に高効率な給電を行う新技術を報告しました。

指導教員である高宮先生をはじめ、桜井先生、研究室の皆様へ深く感謝すると共に、今後も真摯に研究に取り組んでまいります。

人間・社会系部門
竹内研究室
博士課程2年

朴 慧美(パク ヘミ)

ISRS2013 Student Award

International Symposium on
Remote Sensing 2013

Quantifying CO₂ budget from tropical
peatlands in Indonesia by using remote sensing bio-geophysical
modeling



この度は日本韓国台湾を中心にリモートセンシングの権威ある先生方々をはじめ若手研究者や学生までが多く参加した International Symposium on Remote Sensing にて Student Award を受賞しましたことを大変光栄に思っております。この研究では熱帯雨林の二酸化炭素放出量の推定を行う時に泥炭地の乾燥度に着目し、人工衛星から地下水位を推定して CO₂ 放出量を推定しました。この賞にあたりまして、竹内先生をはじめ研究室のみなさんの支えとご協力に感謝します。

機械・生体系部門
竹内研究室
博士課程3年

手島 哲彦

化学とマイクロナノシステム学会

第27回研究会 優秀ポスター賞

化学とマイクロナノシステム学会

多角度共焦点観察のための磁場による単一接着細胞ハンドリング技術の構築



この度、化学とマイクロ・ナノシステム学会第27回研究会において、ポスター賞をいただきました。博士課程より着目してきた、寄生虫の感染過程を解析するMEMSシステムの構築という新しい視点が評価されたことを光栄に感じると同時に、今回の受賞を励みにさらに研究の質を向上させていきたいと考えております。日頃より研究の指針を的確に示唆してくださる竹内昌治先生、尾上弘晃先生、また洞察の深い助言を下さる嘉糠洋陸先生をはじめ、研究室の皆様がこの場を借りて御礼申し上げます。

INFORMATION

■第9回東京大学駒場キャンパス技術発表会開催のお知らせ

生産技術研究所ならびに総合文化研究科・教養学部共催の技術発表会を、下記の通り開催いたします。一般講演以外にも以下の様な講演をお願いしております。

「交流講演」といたしまして工学系研究科機械工学専攻技術専門職員 鈴木 誠氏、また工学系研究科電気工学専攻技術専門員 高橋 登氏、および本年度より交流を開始いたします地震研究所から技術部総合観測室 技術専門職員

宮川 幸治氏の講演をお願いしております。

様々な分野の講演内容となっておりますので皆様、奮ってご来聴下さい。

また、発表会終了後に懇親会を開催いたしますので併せてご参加下さい。

記

日 時：平成 25 年 9 月 11 日（水） 9 時 30 分から 17 時 00 分
場 所：駒場キャンパス（駒 I）21KOMCEE（理想の教育棟）地下 1 階

【口 頭 発 表】

- 「真空断熱式コールドヘッドの開発」（海外からネット中継による発表を予定）
生産技術研究所 基礎系部門（第1部）技術専門職員 河内泰三
- 「低粘度測定への挑戦」
生産技術研究所 基礎系部門（第1部）技術職員 平野太一
- 「東京スカイツリー®への雷撃」
生産技術研究所 情報・エレクトロニクス系部門（第3部）技術専門職員 齋藤幹久
- 「ITO 電極に固定化したプルシアンブルーのセシウム吸着特性」
生産技術研究所 物質・環境系部門（第4部）技術専門職員 黒岩善徳
- 「天井落下に関する実験および吊り天井の危険性」
生産技術研究所 人間・社会系部門（第5部）技術専門職員 大矢俊治
- 「ガラス工作室の活動」
生産技術研究所 試作工場 技術職員 三澤 徹
- 「流体テクノ室の業務と高圧ガスの安全管理」
生産技術研究所 流体テクノ室 技術職員 北原直尚
- 「Web アプリケーション『書架ナビ』：東京大学蔵書検索 OPAC への駒場図書館
書架ナビゲーション機能の追加」
大学院総合文化研究科・教養学部等図書課 情報サービス係 事務補佐員 小川雅弘
- 「駒場博物館所蔵の『弩（いしゆみ）』について」
大学院総合文化研究科・教養学部共通技術室 駒場博物館 事務補佐員 内田宏美
- 「基礎実験の概要と業務紹介—技術職員の関わり—」
大学院総合文化研究科・教養学部共通技術室 技術専門職員 菅沼 諭

【交 流 講 演】

- 「塩水凍結過程で生成される固液共存系を用いた超音波波動伝播実験」
工学系研究科 システム創成学専攻 技術専門職員 鈴木 誠
- 「研究室及び専攻共通室における省電力化のための計算機環境の構築と運用」
工学系研究科 電気工学専攻 技術専門員 高橋 登
- 「東京大学地震研究所技術部の概要と業務紹介」
地震研究所 技術部総合観測室 技術専門職員 宮川幸治

●懇親会のお知らせ

発表会の限られた時間内で収まらなかった討論などを引き続き懇親会の中で論議して頂き、技術者同士の親交を深めて頂ければと思います。

今回は催し物として藤井陽一東大名誉教授（元3部教員）のフルートを始め、他演奏者の参加も含めた企画も考えております。

是非、この機会にご来聴頂ければ幸いです。皆様の多くのご参加をお待ちしております。

日 時：平成 25 年 9 月 11 日（水）18 時 00 分から 20 時 00 分

会 場：駒場 I キャンパス

21KOMCEE（理想の教育棟）地下 1 階

会 費：2,000 円

第9回 駒場キャンパス技術発表会実行委員会委員長 片桐俊彦

TEL：03-5452-6143 / E-mail：toshi@iis.u-tokyo.ac.jp

■東京大学 特許講座 —今日からあなたも特許が書ける— 開講！

東京大学の学生の皆さん！日頃の皆さんの研究成果の中に、ひょっとすると大発明のタネが隠れているとは思いませんか？特許化したら大儲けかも？…でもそれをどうやって特許にすればよいのでしょうか？そもそも、特許ってどういう発明に対して与えられるの？特許を取ったら儲かるの？費用はだれが負担するの？…皆さん、知らないことばかりではありませんか？そこで東京大学生産技術研究所では産学連携本部と共催で、本学学生の皆さんが知財を学ぶための「特許講座 —今日からあなたも特許が書ける—」を開講いたします。

この講座では、発明の意味から特許制度の概要、特許を記載する明細書やその中の請求項の読み方書き方などを、

日ごろから本学の発明をお世話頂いている弁理士の先生に易しく解説していただきます。また発明の届け出制度や、ライセンス化の実例、費用の実際とその支援制度など、本学における特許を取り巻く環境を産学連携本部や東大TLOの方々に解説してもらいます。あわせて、今知財でガンガン儲けている(?)本学教員に、最先端の研究と特許のかかわりを実例を挙げて紹介いただくなど、盛りだくさんの内容となっております。

就職しても役に立つこと請け合い！是非、皆様のご参加をお待ちしております。詳しくは近日公開のホームページをご覧ください！

日 時：2013年12月13日(金) 13:00-17:00(予定)

場 所：生産技術研究所

対 象：本学学生の方、教職員の方

費 用：無料

主 催：生産技術研究所、東京大学産学連携本部

後 援：一般財団法人 生産技術研究奨励会

申込方法：近日公開の特許講座ホームページをご覧ください。定員に限りがありますので、事前申し込みの方を優先させていただきます。事前予約の方には、素敵なテキストを無料にて配布する予定です。

東大特許講座ホームページ：<http://tokkyo-kouza.iis.u-tokyo.ac.jp/>

今後予定している講座の内容（本年度以降、順次いくつかを選んで開講します。）

1. 特許制度の概要 出願、公開、審査、拒絶、公告、実施
2. 特許の読み方・書き方講座 明細書、請求項、実施例 etc.
3. 東京大学における発明の手続き 発明届、(非)承継、費用、報酬 etc.
4. 研究と特許 —本学における成功(失敗)事例の紹介—
5. 特許にまつわるよもやま話 特許係争、弁理士になるには etc.
6. 講師・弁理士とのQ&Aコーナー

問い合わせ先 生産技術研究所 経理課企画チーム (rk@iis.u-tokyo.ac.jp)



英国を代表する港町ブリストルより

私は昨年(2019年)の10月より約1年間、英国のブリストル大学にあるACCIS (Advanced Composite Center for Innovation and Science)にて在外研究を行っています。ブリストルは英国の南西部に位置する歴史的な貿易都市で、現在は航空機メーカーのエアバス社や、航空機用エンジンで有名なロールスロイス社の工場が存在します。ご存知の通り、近年、民間旅客機への複合材料の適用が進んでいるため、ACCISでも政府や企業からの支援を受け、先進複合材料に関する研究を広く進めています。特徴として、教育面ではACCIS Doctoral Training Centreという4年制コースがあり、研究面では研究室間の交流促進を図るため、ACCIS オフィス内に航空宇宙工学専攻の教員が個室を構え、その個室群に隣接した巨大スペース内にポストドクや博士課程の学生の机(70台以上)が並んでいます。そして客員研究員の私も同じスペース内に机をいただき、若い研究者達の熱気に包まれながら研究生活を送っています。

その研究活動ですが、私はNDI (Non-destructive inspection) 研究室の博士課程の学生と一緒に、複合材料中の損傷検知に関する研究を進めています。具体的には、NDI研で開発された、圧電セラミックスPZT超音波素子に電気エネルギーを遠隔で送受信可能なシステムの適用を前提とし、複合材に組み込んだPZTディスクで超音波ガイド波を励起・受信することにより、複合材料に異物が衝突した際に発生する衝撃損傷を検知することを試んでいます。本研究を通じて、英国における超音波関係の研究の層が厚いことを実感し、学生に戻った気分で多くの刺激を受けています。

また、ブリストルは日本ではあまり聞きなれないかと思いますが、歴史的な建造物や古くて美しい街並みが広がり、車で1時間程度の範囲にはNational Trust等のさまざまな観光地が存在しています。その一方で、ショッピングモール等の近代的な大型施設も多く、休日には家族とともに英国生活と歴史的文化を楽しんでいます。私の滞在期間も残り僅かとなりましたが、最後まで多くの知識と経験を吸収し、帰国後の研究・交流活動に生かしていきたいと思えます。今回の在外研究にあたり、ご配慮をいただいた先生方や、留守中もサポートしてくれている研究室メンバー、そして国際研究者育成助成でご支援いただいている生産技術研究奨励会の関係者各位に深く御礼申し上げます。

(機械・生体系部門 岡部 洋二)



工学系の中心的な建物でACCISの施設が存在するQueen's Building

• PROMENADE •

Travele necesse est!* *Thoughts on studying and traveling*

I see academic life as the simple act of breathing. To keep the oxygen flowing into our veins it is necessary to keep the constant movement of breathing in and breathing out the air. In the process of developing academic research, I would define “breathing out” as production, and “breathing in” as inspiration.

From my trajectory in Hiroshi Ota Laboratory, my “breathing in” moments were marked by many academic trips I made over the past two years. Since 2011, I visited locations all over Japan and in the world, totalizing a number of around 20 cities. Despite the different locations, the scope of activities would also vary much participating in workshops, tutoring students, doing internships,

field surveys and attending conferences.

For architects and urbanists, especially in the scope of urban regeneration traveling is an important ally for a better understanding of the elements that constitute city life. In my case, it became one of my greatest sources of inspiration.

Once the Roman General Pompey would say to his sailors: “Navigate is needful, live is not needful” (in Latin: “*Navigare necesse est, vivere non necesse*”, (in *Plutarch lives*, V, c.f. Plutarch, Perrin B. 1917). With these words, the General not only wanted to encourage them to enter into a risky journey overseas, but also to guarantee the economical expansion of the empire that depended crucially on

• PROMENADE •

navigations at that time.

I can associate my trip experiences in Ota Lab to this parable adopting the broad sense of the word “navigating”. Fernando Pessoa would later paraphrase Pompey, saying that “Living is not necessary, what is necessary is creating” (in Portuguese: *Viver não é necessário; o que é necessário é criar*. In *Obra Poética*, Pessoa, 2004.). The Portuguese poet broke down “navigating” into the meanings of “exploring” and “creating”.

I started my doctoral course in urban regeneration in April 2011, only one month after the Great East Japan Earthquake and Tsunami stroke Tohoku region. At that time, I was thrown in an atmosphere of uncertainties for future directions in urban reconstruction of the affected areas, which made me think over the role of academy in such emergency situations. At that moment the first thing we did was traveling to the site. Traveling, not only to see the extent of the damaged areas, but also to establish contact with locals, stakeholders, urban processes, and this way “getting out of the box” of books and papers.



Fieldsurvey in tsunami affected areas, Shibilitachi Workshop 2011.

In the next year, my academic experience was enriched with another less conventional project in Osaka. In summer of 2012, we would set up an art collective to perform at the art event called Osaka Canvas Project, part of Aqua Metropolis festival (*Suito Osaka*). The project brought us the challenge to create an artwork using our academic background

in urban studies. Despite this task, our period of stay in Osaka was very fruitful to get in touch with professionals of different fields and local artists.

The group of all those apparently scattered experiences ended up shaping the new prospects of my ensuing research, which now focuses on community development through art initiatives. In my case, traveling became my main source of inspiration, and decisive to offer me enough material to carry on my urban studies.



m.y.city art collective, Osaka Canvas Project, 2012.

Remembering Pessoa’s words, someone might question how “navigating” is more needful than living. My interpretation is that “living” is of course necessary but only worthy and complete when fulfilled with venture.

*in English: “Travelling is needful”.

Sources:

PESSOA, Fernando. *Obra poética*. Organized by Maria Aliete Galhoz. 3rd ed.

Nova Aguilar, Rio de Janeiro 2004.

PLUTARCH, Translated by Perrin B, *Plutarch lives, V: Agesilaus and Pompey. Pelopidas and Marcellus*, Loeb Classical Library, 1917.

Author: Maria Claudia Candeia de Souza

PhD candidate, Hiroshi Ota laboratory, IIS



FRONTIER

復興という新しい地域づくりのフェーズをどう考えるか

都市基盤安全工学研究センター 加藤 孝明

3月から数えて節目の時期を迎えるたびに「遅れる復興」という言葉が新聞を飾る。「復興は遅れているか?」「復興はうまくいっていないのか?」。まちづくり、都市計画、防災(復興を含む)の専門家として被災直後から釜石市の漁業集落群をフィールドとして「応援」活動をしている立場から見ると、むしろ「不自由な感じ」というのが一番しっくりする。

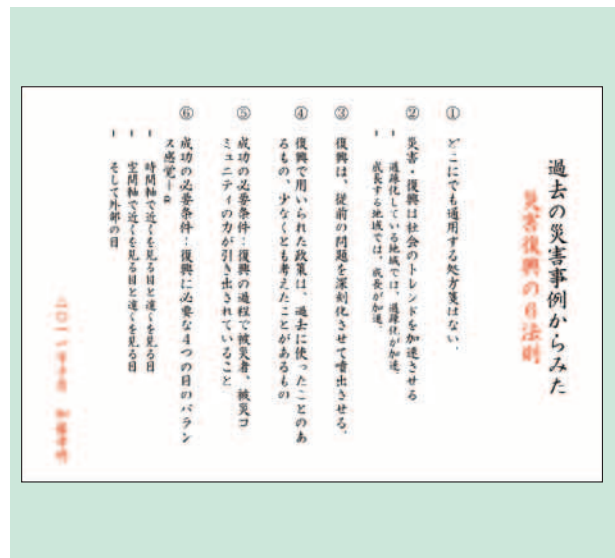
今回の災害の特徴を表わすキーワードを挙げるとすると、「時代の変局点を越えた時代」、「超壊滅的」である。これに対して日本の既存のしくみは、いずれにも対応できていない。右肩上がりの単調な時代はとうの昔に終焉したが、社会制度の基本構造は未だ右肩上がりを前提とし、トレンドの変化に追従できないでいる。例えば、復興の中心となるべき都市計画関連事業は、地価は上がり、床需要も高まることを原動力としている。それゆえ、さらに被災を契機に過疎化が加速する地域において成立させることは基本的に困難である。超壊滅的な被害に対して集落、都市をゼロから創り上げるという総合的アプローチが必要だが、既存のしくみには復興を包括的に考える枠がなく、従来通りの縦割り事業で対応せざるを得ない。さらに今回の場合、従前の地域主権の流れの中で「被災者に寄り添って」という言葉に飾られ、非力な被災自治体が主体となって復興を進めることが選択された。つまり、被災自治体に委ねられた。今回の災害復興は「状況に対応した政策的道具が揃わない中でのボトムアップ型の復興」なのである。冒頭の「不自由な感じ」は、すべてここに帰着する。

被災地は、過去の価値観から言えば、過疎化、超高齢化、基幹地域産業の衰退を抱える地域である。一方で、すでに人口が減少し、社会縮小(シュリンク)の最善手法を模索すべき時代においては時代の最先端地域とも言える。現在の復興は、この見方にとって、時代の最先端地域における「地域づくりの新しいモデルを創り出す過程」と捉えるべきであろう。被災地に蔓延する「復興の目的は復興事業を期日までに進めること」という雰囲気から「持続性のある明るい未来を描き、実現すること」という本来の復興の目的に転換させる必要が

ある。被災から2年を越え、仮設住宅暮らしがある意味、当たり前の景色になった今、被災各地では被災者自身による地域づくりの新しい息吹が感じられるようになった。社会の様々なセクターによる地に足のついた多様な工夫、努力が確実に始まっている。依然として山積する様々な復興課題について目を奪われがちであるが、その背景にある復興課題の根本構造を改めて理解することが復興という地域づくりを模索する営みを前向きなものに転換することにつながるであろう。

今回の復興の成否は、南海トラフ巨大地震をはじめとする次の大災害への復興準備につながるだけでなく、今後の日本の地域づくりを左右するものになるだろう。

最後に「復興の6つの法則」なるものを示しておきたい。説明は割愛するが、すべての世界の復興事例に共通するものであり、復興を根本から考える助けとなる。研究活動として進めている被災地の復興支援、次の大規模災害への復興準備を日本の地域づくりを根本から考える契機としたい。



■編集後記■

今回は表紙・裏表紙ともに、復興関係の話題を取り上げてみました。あの震災から2年半が経ちましたが、被災各地では、復旧だけではなく、人口縮減や産業衰退、まちづくりの担い手不足といった課題を抱えており、

難しい状況は今なお続いています。被災地に足を運ぶたびに、私たちの学のありようも、鋭く問われていると感じます。

(太田 浩史)

■広報委員会 生研ニュース部会
〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1
東京大学生産技術研究所

☎(03)5452-6017 内線56017,56018

■編集スタッフ

小倉 賢・守谷 頼・梶原 優介

大石 岳史・太田 浩史・山田 隆治

E-mail: iisnews@iis.u-tokyo.ac.jp

生研ホームページ

http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/